端切れをつないでいくように 人の心もつなぎたい そして豊な心を伝えたい

人 HITO

汐見（しおみ）カツエさん
（日本手芸普及協会正師範）

パッチワークの魅力を伺うと、「今捨てるものが、美しいものに形を変えて、20年、30年先まで生き延びるんです。」とおっしゃる汐見さん。今でもお母さんから譲り受けた小物入れを大切に持っているそうです。

水野にお住まいの汐見カツエさんは、日本のパッチワークの第一人者として、活躍されています。

汐見さんは、幼いころに母親が小さな端切れを何枚も縫い合わせてきれいな小物入れなどを作っていくのを見て、「早く大人になって私も作ってみたい。」と思ったそうです。

子育てが終わったころから本格的にパッチワークを始めた汐見さんは、全国に10名ほどしかいない日本手芸普及協会パッチワーク本部講師として、全国各地で1千人を超す講師を育ててきました。そして、昨年の9月にアメリカで開催された「世界パッチワーク&キルト展」には、お弟子さんが3人も出品しました。お弟子さんとの交流は、端切れが一枚のパッチワークになるように、途切れることなく広がっています。

正師範となられた汐見さんは、昨年の3月に講師養成の職を後進に譲り、市内の小学5・6年生を対象に、その素晴らしい色彩感覚と技術を無料で提供し始めました。教員の経験もある汐見さんは、少年犯罪の報道を耳にするたびに、「花を見て美しい、鳥を見て可愛いと自然に思えるような、五感に訴える教育ができたら。」と思うそうです。そして、そんな気持ちから、子どもたちに手をさしのべているのです。

着物を形どったタペストリー

作品を持って帰るときの子どもたちの表情は、とても清らかで輝いているそうです。「単に針仕事を教えるのではなく、パッチワークを通じて優雅な気持ちや優しさ、思いやりなどを教えたいのです。そして、その子どもたちが親になったとき、同じような気持ちで子どもに接して欲しいんです。」とその思いを語ってくださいました。

これからの夢を伺うと、「今まではお手本としての作品ばかりでしたから、これからは、自分のために大きな作品を作りたいです。」とのこと。どんな素敵な作品ができあがるのか、今からとても楽しみですね。

狭山の生態系 69

イカル
（スズメ目アトリ科）

全長約23㎝、頭が大きくくちばしは太く黄色で、目の先と目から上の頭は金属光沢を帯びた黒色、それ以下の体は、ほぼ灰色です。

翼の大部分は黒く、初列の風切羽に白斑がある、全体的に太った感じのする鳥です。さえずりは、かなり通る声で、「みのかさきー」、「おきくにじゅうし」など、いろいろな聞こえかたがあります。大きなくちばしで堅い木の実をくわえ、口の中でまわしながら割って中身を食べます。日本では北海道、本州、九州で繁殖しています。狭山では、冬から春にかけて市街地周辺の雑木林などで、群れが観察されています。

撮影：県生態系保護協会狭山支部 矢内昭夫さん（水野）

家庭で不用になった物も
工房で生まれ変わって再利用
リサイクルの輪が広がります

REPORTER'S EYE

【リポーター】
小林雅子さん（広瀬東在住）

リポーターズアイでは、行政のしくみや話題性のあることがら、市内のいろいろな施設などを、市民のかたがリポートします。

持ち込まれた家具は、修理工房で生まれ変わって展示されます。ぜひ一度見に行ってみませんか。
リサイクル工房展示室☎953－4400（第二環境センター内）、不用品登録制度専用電話☎954－4953

皆さんは、「家族が増えて買い換えたタンスを捨てるのはもったいない、でも置いておく場所がない。」とか「これはまだ使えるけど、引っ越し先には持っていけないな。」、「本棚が欲しいけど、ちょっと高くて…」などと思ったりしたことがありませんか。使わなくなった大きな家具類は、今までは粗大ごみとして処分するしかなかったと思いますが、今回は家具類が不用になった人にも、また、家具が欲しい人にもお勧めしたい素敵な施設、リサイクル工房をご紹介します。

工房は、リサイクル都市を目指す狭山市にふさわしい、ごみを減らすための取り組みの一つとして、昨年11月に新狭山のリサイクルセンターから稲荷山の第二環境センターに移転しました。展示室には衣類をはじめ、本や陶器、おもちゃなど、家庭で不用になった、手を加えずに使用できる物が展示してあり、無料で持ち帰ることができます。また、以前はリサイクルセンターで行っていた不用品登録制度の窓口もここにあります。これは自分が不用になった物、欲しい物を電話で登録しておくと展示室が仲介役になって、それぞれに紹介してくれる制度で、以前私もベビーカーが必要になったときに登録して、譲っていただいたことがありました。これだけ聞くと「今までと変わらないじゃないか。」と思うかたもいらっしゃると思いますが、リサイクル工房では新しい取り組みとして、家具類を再生する修理工房をつくったのだそうです。

再生するのはシルバー人材センターの会員さんで、元は大工さんとして活躍していたかたもいらっしゃいます。修理工房では、持ち込まれたり、粗大ごみとして出されたタンスや本棚などの大きな家具で、簡単な手直しをすれば使える物を修理し、生まれ変わらせて必要な人に譲り渡されます。工房には自分で持ち込むのが原則ですが、大きくて持ち込めない場合は、予約をしておけば玄関先まで来てくれて、再生できるかどうか判断し、再生できる物は引き取ってくれるとのこと。これならトラックがなくても心配ありませんね。修理工房で手を加え生まれ変わった再生品は1か月間展示室に展示して、希望者の多い物は毎月抽選を行うのだそうです。そして当選した人には再生にかかった費用として5千円以内で譲り渡されます。そのほか、市内のリサイクルショップの情報を皆さんに提供してくれるなど、リサイクルに関する情報がいっぱいです。展示室は毎日100人以上のかたが利用しているそうで、私がお邪魔している間にも、多くのかたが来て、それぞれお気に入りの物を見つけて持ち帰っていました。

展示室は月～土曜日の午前9時～11時30分と午後1時～3時30分に開いていて、市内在住、在勤、在学の人が利用できます。私もこれからはこの工房を活用して、今まで以上に我が家のリサイクルを心がけたいと思います。皆さんもぜひ一度リサイクル工房に行って、自分の目で見てみませんか。きっといい物が見つかると思いますよ。

衣類も洗濯してあってとてもきれい。思わず手が伸びます。「うちにも小学生の子がいるんですよ。」と会話も弾みます。